

# F. W. A. フレーベル『母の歌と愛撫の歌』の 教育方法学的検討

— 「遊戯の歌」①—②③に見られる子どもの「精神」の成長—

児 玉 衣 子

## 序

一昨年に引き続き、同一テーマの下に『母の歌と愛撫の歌』の中の「遊戯の歌」を検討する第2回目である<sup>1)</sup>。

今回は「遊戯の歌」第II段階第一区分と目される①「たてによこに」から②③「塔の上の子どもたち」まで<sup>2)</sup>を取り上げる。検討の目的は前回同様、各歌においてどのような子どもの発達の状況からどのような「精神」の成長を目指す保育内容へと導かれているのか、ということ明らかにするところにある。そのために各歌を以下の4観点から検討する。

1. 主人公の子どもの発達の状況は、どのような表れに捉えられているのか。
2. その発達状況から、どのような「精神」的なことがらへと導かれているのか。
3. 子どもに語り聞かせるわけではないが、母親（両親、保育者）が心の内に持すべきこととして、どのようなことがらが語られているのか。
4. 方法的に注目すべき事柄、その他。

## 1. 各歌の検討

### ①「たてによこに」

「欄外装飾画の説明」（以下、「説明」と略記）の冒頭は「この遊びとともに私達はひとつの新しい、全く独自の段階に歩み入る。・・・それは、最もかすかな歩みで、知識と仕事の生活(Erkenntnis-und Gewerbsleben)に導き入れる。」と語り始められる。つまり、これ以降、大人は意図的に、遊戯を通して、幼児の生活の中で幼児なりの知識と仕事に関わる内容へと導くことが宣言されるわけである。この「知識と仕事の生活」の内容を以下、第II段階（①「たてによこに」—④「建具やさん」）全体を通じて各歌毎に探ることになる。

#### 1 [子どもの発達の状況]

主人公の子どもの身体の発達の状況については、前回取り上げたように、次の②「お菓子づくり」までは母親が子どもの手を持って行なう遊戯であって（除⑧⑨⑩）、その意味ではそれま

## 児 玉 衣 子

でと大差ないと思われる。

しかし、人間関係においては、⑩「小魚」において初めて母親を離れて兄について外に出かけた主人公は、絵によると、隣近所の範囲と思われるが、子ども同士3人で連れだって歩いており一步成長している。

仕事（労働）にも関わるが、絵では若い職人が大きな仕事台で的を作っているところを、ようやく仕事台を覗けるくらいの背の高さの幼児たちが、端からへばりつくようにして眺めている様子が描かれている。職人の仕事を求めて見に行き、飽かず眺める幼児の姿である。

## 2 [精神的內容]

この歌は、軽やかなことば遊びで、的作りの仕事の手順と出来上がった的を買うには代金（正しい報酬）が必要であることを教えている。ただし、次項 [母親] で触れるが、売買の仕組みを教えるのが主目的ではなく、フレーベルのいう全体 (ein Ganze) という観念の下に出されていることがわかる。

「説明」においてフレーベルは、この遊びが普及していることにふれて、「それはなぜなのか？」と問いかける。そして、彼自身はこの遊びの中に「子どもの注意を位置と形 (Lage und Form) およびそれに付随する諸現象へ向けようとする最初の徴候を認める」と述べている。そして、それらに該当してあげられるのは縦線、横線、垂直、水平、中心、直角、平面等である。

ただし、これらの語を母親が言ってきかせても子供は1語 (Wort・・・ 隔字強調) も理解しないだろう。しかし子どもはそのことながら (Sache・・・ 隔字強調) については何らかの予感を持つに違いない。以上のように述べて、フレーベルは母親が遊びに生じる形や位置をそのつもりで作出し、子どもがそれを言葉の知識としては知らなくても見知り (事物の知識にして) 何かしら心惹かれることを望むのである。

## 3 [母親の内に持すべき事柄]

題詞には次のようなことが述べられている。すなわち、この遊びには無意味なようだがいろいろなものが入っており、原石のようだ。すべての働きは仕事の働きでも何一つ気儘なものはなく、よく釣り合いがとれていることを、もう子どもにも知らせよう。ひとつになること (die Einigung) において自らを見、ひとつ (Eins) にむかって自らを結びつける。この心理を遊びに纏わせてこの遊びで知らせなさい。そうすれば不思議にもかすかに予感して洞察への道が開かれる。ひとつの全体 (ein Ganze) へ導きなさい。物事は持ちつ持たれつだ。それは森羅万象 (das All) から迸り出るだろう。それに正しい報酬を与えなさい。そして感情を伴って把握すれば生活においても繋がりのないものにはならない。

以上のような題詞の内容からすれば上述の歌の、仕事 (的作り)、そこに生じる位置や形、そして的の報酬としての代金、という一見関係のない事柄は、フレーベルにおいては「全体」あるいは「ひとつ」につながる諸相として把握した上で、母親から子供に向かって各々の事柄を、

直接の事物の観察と事物の経験によって感じさせることが求められている、ということになるだろう。

また、「説明」には、この後、次のようにも言われる。すなわち、自分で観察したものには三つのものが結合されている。事物（特殊なもの）、一般的なもの、これら二つのものの子どもに対する関係。これら三つのものはひとつの目標へと導く。それは事物を大きさ（die Grosse・・・ 隔字強調）と数（die Zahl・・・ 隔字強調）と形態（die Gestalt・・・ 隔字強調）とに従って自分の力で事物を把握することに他ならない。

「大きさと数と形態」は、既に『人間の教育』から学校教育において空間把握の基本的内容として重視されていることがらである<sup>3)</sup>。ただし、ここではこれらの語の内容は概念化するためにではなく、幼児の感情や感性に訴えて「全体」を予感させるために示され伝えられることが求められている。

#### 4 [その他、方法的に注目すべき事柄]

この時期の幼児の教育方法としてフレーベルによって確立され今日も継承されている基本的方法がここに提出される。それは、言葉として抽象化された知識でなく事物や事象それ自体を体験して獲得した事物の知識を、という教育方法である。その内容に関して2点の注目すべき事柄が述べられているので、確認しておきたい。

第一に幼児に経験されているのは、ある事物（特殊なもの）、一般的なもの、これら二つのものの子どもに対する関係である、という点である。例えば一個のボールについて考えてみると、幼児が遊ぶひとつのボールは、色、形、柔らかさ、重さ、表面の手触り、大きさ等々において幼児に把握される。その情報の蓄積の上に幼児は他のボールを見た時にそれをもボールと認識する。

幼児が遊ぶボールは、上述のような客観的情報の蓄積によってのみボールなのではない。それを投げ、転がし、手に持ち、追いかけて、あるいは誰かと投げ合ったり転がしあったりする時の感情を伴い、また、遊んでいる時にはあたかもそのボール自体が一個の生物であるかのような親近感と愛着とをもって知っているところのボールなのである。他のボールについても、既にあるそのような感情を伴う理解に基づいて類推されることになる。言い換えると、自分との関係を伴わない事物の理解は、幼児にとっては大変に貧弱な経験にしかなり得ない。しかも、このような特徴的な認識によって幼児は自己の世界を広げ、また、世界を予感していく。

以上のような幼児の事物認識の特徴が捉えられ、そこから、幼児の教育方法についても出されていることは、幼児の発達の状況から教育方法も考え出されたことをも明らかにしており、その点で今日においても注目される。

第二に、ここで幼児に特有な事物理解から少年期の教育内容への橋渡しとして、「大きさと数と形態」という客観的認識に言及されている点である。「大きさと数と形態」の概念的内容の展開が小学校教育の課題とすれば、幼児期の課題は大きさ、数、形態ということをも自分との関

児 玉 衣 子

係において認識し理解するということになる。

以上、フレーベルの幼児の「知識」に関する教育の内容と方法には、学校教育への連関の視点も含めて、幼児教育における知育について今日も基本とされるそれらの提示がなされているといえることができる。

⑫「お菓子づくり」

1 [子どもの発達の状況]

先にもふれたように、この遊戯は母親が子どもの手を持って（身体にふれて）すると言う点で最後になる遊びである。ドイツには“Backe, backe Kuchen”（赤ん坊のおててチョコチョコ）という遊び歌があるというが<sup>9</sup>、この歌の題（“Patsche Kuchen”）といい動作といいこの赤ちゃん歌の発展のようであって、この歌を最後にいよいよ赤ちゃん時代の名残をいよいよ抜け出る、という感想を筆者は持つ。

これ以外に絵および「説明」から幼児の発達を汲み取れるのは間食がもはやパン粥ではなく菓子になっている、および、数人の子どもによるままと遊び（Brotbackens und Essens）が捉えられている、という2点である。

2 [精神的內容]

歌詞は、母親の作った生の状態のお菓子をパン屋さんがオーブンに入れて焼いてくれる、というものである。

題詞にはこの歌の意義が「いろいろなことが喜ばしく繋ぎ合わされなければならない。誰でも正しい時に自分の分担を果たすことが必要だ。仕事をうまく果たさなければならない。そうすれば喜びが齎らされる」と述べられ、それが子どもに伝えられることとして語られている。

そして「説明」においては「この遊びは子どもの活動衝動とし四肢使用の衝動を養い、同時に外部の生活とも関係づける必要から生まれた。」と述べられた上で、子どもの望みと母の愛とを仲介する（vermitteln・・・ 隔字強調）ところのパン屋（Backer・・・ 隔字強調）が語られる。

フレーベルは「仲介する」という働きを重視している。すなわち、離れたものや対立するものは「仲介」されて結ばれてひとつになる、と彼は考える。その点で「仲介する」という働きは彼の考える「ひとつ」「全体」等の実現になくしてはならない働きである。この歌では「仲介する」者としてパン屋だけが挙げられている。しかし「説明」では子どもの口に菓子が入るまでもっと大きな連関が視野に入れられることになる。すなわち、子ども－母親－パンや－粉屋－農夫－田畑－自然現象－神である。

⑦「草刈り」においても言及された連関の鎖は、この歌になると「鎖を繋ぐ究極の環としてすべてに対する神の父愛（Vaterliebe・・・ 隔字強調）」を子どもに伝えるようにと語られるのである。ここに子どもはすべてのものは各々無関係に存在しているように見えても連関しており、

神の父愛において円環に繋がると感じるようになる。

大切なのは幼児にとって自分の周囲の世界がこのように循環的な円環に繋がっていると感ぜられることの内容であろう。ここに描かれる円環は自然科学的な因果の循環円ではなく心情的なそれである。この心情的な円環は無関心、不安、疑い、恐怖等によって繋がれるのではなく、間接であっても自分に関わっていることを感じとり「お礼を言う」という行為に見られるように、それを信頼し関わっていくようになる、そのような円環である。しかも神に繋がれるという点で、因果の閉鎖的循環円なのではなく因果の見えないところにも繋がりを感ぜようとする心情的な循環円であるがゆえに閉じられた円環ではない。

このような連関のあり方を感じることで幼児は周囲の世界を愛し能動的に関わっていくことが可能になるであろうし、それは、ひいては自分自身を信頼することにもつながるだろうと思われる。

労働についても自然現象についても、基本的に上述のような世界の環に位置づけられたうえで、以降、幼児としての社会的関心、自然科学的関心の世界へと展開されていくと考えられる。

### 3 [母親の内に持すべき事柄]

この歌から、母親に対するフレーベルの語りかけに関して極めて注目すべき事柄が2点見出される。

第一に、今までは野放しの自然的な母性感情によって巧くいったが、これからは母親自身が注意深い、内的な、結びあわせる精神によって子どもを導かなければならない、と語られる点である。

母親にこのような注意が語られた後で、母親から子どもの上述の生活の鎖の連関が示され、神の父愛が語られるのである。そして、それは神聖なものを生活に引きずり降ろすことではなくそれに必要な内的意義とより高い尊厳とを与える萌芽なのである、とされる。

このゆえに幼児のままごと遊びについても、それは大事にされなければならない、大人のあなたは幼児のままごと遊びに快さを感じることができないのならば少なくともそれを妨げるな、と語られる。なぜなら、ままごとに現れる子どもの生活という聖所において、子どもが無邪気に無意識に自分自身を形づくることをあなたが許さないならば、子どもは一体どうして、今も一生を通じて、神聖なものを無邪気に自分の内に育むことができるだろうか、このようにフレーベルは母親に語りかける。

そして、この歌以降、フレーベルは、幼児の無邪気な無意識な生活が損なわれないためにも、幼児のその外的な表現に内的意味を結ぶためにも、母親の子どもへの愛が母親自身の精神によって導かれるようになることを求めるのである。

第二に、意識化することを求められた母性愛に関わると思われるが、母親に対するフレーベルの呼びかけが、以降、変化を見せる。今までもこの後もフレーベルは文中でよく Mutter と呼びかけるが、この歌では珍しく母親への呼びかけは見られない。しかし、次の⑬「鳥の巣」

児 玉 衣 子

になるとフレーベルは初めて、Du, sinnige Pflegerin (思いやり深い養育者のあなた) と呼びかける。つまり、Mutter (お母さん) とは呼びかけずに Pflegerin と呼びかける。そして、⑮「鳩の家」になると Mutter und ihre Vertreterinnenn (お母さんとそれに代わる人たち) と併置して呼び、⑳「子どもとお月さま」に至って Mutter und Kinderpflegerinn (お母さんと子どもを育てる女性) と、母親と保育者との両方に対して呼びかけるのである。

つまり、意識化した母性愛を要求した後、フレーベルはそれまで母親のみに行っていた呼びかけを母親と保育者との両方に行い始め、㉑の歌に至って、明確に保育者をも対象に加えている。だから、この歌 (㉑) あたりから保育者の参入が意図され始めると考えられる<sup>9)</sup>。

4 [方法的に注目すべき事柄、その他]

上述のように、ままごと遊びに代表されるところの幼児の自由な、自発的な、没頭している遊びが教育の視野に取り込まれ、そのような幼児の遊びが教育の出発点と明確に位置づけられている。しかもその際、幼児のこのような遊びは次の3点をもって教育的意図の中に導かれている。

1. 幼児のこのような遊びに大人が価値を見出せなくとも、少なくとも彼らの遊びを妨げない。
2. 幼児のこのような自発的な自由遊びを、明確な大人の指示内容によって指導するのが教育ではない。
3. 幼児が生活の中で個別に知っているものについて、生活のより大きな連関によって結ばれているものについては、遊びを通して、その幼児にとっての連関を知るように導くのが教育内容になる。だから当然、その際には幼児の経験に重ねられるような方法が取られる。

⑬「鳥の巣」

1 [子どもの発達の状況]

この遊戯の動作は最初に保育者であるあなたが行い、次に模倣衝動に駆られたあなたの子ども自身に行わせる、と述べられる。

動きはこれまでのように一種類だけの動作ではなく、途中から変化し (卵がかえって雛がのぞく)、二種類の動作から成立する。

ここで子どもは相手の指の動作を見ただけで真似られ、しかも二種類の動作を真似られるようになっていく。

また、「説明」の後半には、母親から子どもに向かって「母がいつもお前と一緒に居られなくても、お前はすぐに泣いてはいけない。」と語られている。母の姿が見えず不安ではあっても、理由を知り見通しを与えられると、しばらくは持ちこたえられる位にまで成長していることが

伺われる。

## 2 [精神的內容]

ここでは鳥の巣籠りの時期 (die Zeit・・・太字強調)、場所 (der Ort・・・太字強調)、方法 (die Art・・・太字強調) が鳥によって異なることが細やかに語られる。例えば餌になる虫の種類とそれのいる場所によって棲む鳥が違ふこと、巣の場所、色、形等についてである。いずれも幼児が見るに困らないような口振りであつて、森林地方の豊かな自然を感じさせる。

科学的興味を育てていく上述の記述とともに、この後、子どもの口を借りて、子どもが雛を親鳥から見捨てられたと勘違いして同情する様子が語られる。これに対して母親は、母鳥は雛を見捨てたのではなく餌探しに出かけていること、父鳥が巣の傍らで見張っていることに気づかせる。

さらに母親は子どもに向かつて、「親鳥が両方とも餌探しに出かけて居なくても、なつかしい太陽が暖かく巣に入って母鳥のように雛をいたわった。私がお前と一緒にいられなくてもお前もすぐに泣いてはいけない。天の父の愛にみちた日光は子どものお前を見捨てない」と語る。つまり、母親はここで、具体的に一緒にいなくても目には見えなくても繋がっているという愛の在り方を語る。これに対して子どもは、「ああ、ママの愛よりもいいものはない」といって、母親の愛を意識化している。

## 3 [母親の内に持すべき事柄]

この前の歌で本能的母性愛から自覚的母性愛に成長することを望んだフレーベルは、この歌の冒頭で、「考え深い養育者 (sinnige Pflegerin)」と呼びかけることによって、母親に「考え深い」とはどのようなことなのかという思いを抱かせるようにしている。そして、内容として語られるのは以下の2点である。

第一に、子どもの注意を科学的理解へと導く、つまり時期、場所、方法に気づかせる、という点である。

第二に、生命の連関に気づかせる、という点である。この前の歌で初めて生命の連関の最後の環として神に言及された。しかし、ここでフレーベルは、条件が子どもの内にどんなに深く確実にあるとしても、だからといって一気に、露骨に、生命の連関の予感を目覚めさせられるものではないとして、慎重すぎるほど慎重に、ゆっくりと子どもの生活とその発展のあとに一步一步つき従っていくことを求めている。そして、この連関を連関たらしめるところの愛が語られる。

## 4 [方法的に注目すべき事柄、その他]

上述の2点に関して、ここでは第一の部分が全面に出るように勧められている。注目すべきは、その背後で、第二の内容で子どもの感性を支えて導くようにと促している、という点であ

児 玉 衣 子

る。

つまり、どちらも必須の内容とされている。子どもが成長に従って自己の世界を広げていく際に、対象を自然科学的、客観的に捉える側面と人格的、心情的の捉える側面との両方から、対象に関わらせる。

それは子どもの生活から生じ、子どもの生活の中にあり、子どもの気づきに従って、一步一步、とされるのである。

つまり第一および第二の内容からいい得ることは、思考と心情とが一致しつつ知ることをフレイベルは求めているということであろう。そして、そのことが全体性の前理解としての予感につながるということであろう<sup>9)</sup>。

⑭「花かご」

1 [子どもの発達の状況]

子どもが初めて、自分一人で、指を左右非対象に組む遊びである

2 [精神的內容]

歌では、「籠を拵えて花を入れ、それをお父さんの所へ持っていこう。可愛い花よ、お父さんの傍らにいてね」と歌われる。

絵本として見ながらの会話として、以下のような内容が取り交される。

子「なぜ皆こんなに一生懸命、きれいな花を集めて籠に入れるの？」

母「今日は皆の愛するパパの誕生日なの。ほら、パパは庭の向こうの四阿に座って絵を描いている。きっと子ども達のためにほがらかな朝、生活の始まりの絵を描いているのでしょう。

この妹は小さい籠に花を入れて皆より一足早くパパのところへ行ってます。パパは喜んでこの子に、もし自分の誕生日にお前や姉さんや兄さんやママがいなければ、周囲の美しいものもこんなにも嬉しく感じないだろう、と語っています。

さらにパパはこの小さな娘に向かって、自分の喜びは自分に生命を与え、全てのものに生命を与える神様に負っている、と語り聞かせます。そして、ママや姉さんや兄さんもこちらに来て、神様に感謝を捧げよう、といます。」

子「ママ、私達のパパの誕生日はいつ？その日には私も花籠に花を入れてパパに持って行きましょう。」

以上のように、「子どもを早くから感情のこもった注目へ、よく考えられたあらゆる方面への養育へ、眼には見えないが感じ得る内的な、とりわけ人間相互の精神的結合、子どもと家族の生活へ導く」ことが意図されている。

既に「他者との人格的關係」（拙論、『人間教育の探究』4号掲載）において述べたが、この歌は本書中、唯一、父親を正面切って取り上げている。この前の⑬「鳥の巣」において母の愛



を意識化した子どもは、引続いてこの歌で父の愛を意識化する。それも、父の誕生日という家庭内で意義と喜びを感じる機会に、父自身の口から家族への愛を聞かされて自分も父を愛していることを意識化している。

### 3 [母親の心の内に持すべき事柄]

上掲の「子どもを早くから感情のこもった注目へ、よく考えられたあらゆる方向の養育へ、眼には見えないが感じ得る内的な、とりわけ人間相互の精神的結合、子どもと家族の生活へ導く」ことが母親の意図とされる。

フレーベルは、家庭を、夫婦や子どもがいるならば互いの関係が自然的に無意識的に維持されるものとは考えていない。人類という神の世界（全体、一なるもの）の一分枝を構成する分枝と考えている。それゆえ、家庭を構成する各員（家庭の分枝）相互の愛の関係は、神の世界に気づき、神の世界を経験する基本的要因として子どもに経験されること、子どもがそれを意識化することを求めるわけである<sup>7)</sup>。

## ⑮「鳩の家」

この遊戯は指遊びとしても好まれたのかも知れないが、フレーベル自身の保育の中でもわが国のお茶の水幼稚園の最初期の保育においても、集団遊戯として子ども達に多いに好まれたことが記されている<sup>8)</sup>。

### 1 [子どもの発達の状況]

動作としては、左右の手の動作が異なり、二種類の動作をするという点で⑬⑭を合わせたようであるが、実際にはそれらに比べてさほど難しいわけではない。むしろ、この遊びを楽しむ背景として、ここでは自分一人でも適度な距離の野外へ出かけていき、野性の動植物に心を躍らせて帰ってくる、そのような経験を適度に積んだ位までに成長したところが捉えられて、遊びにされている。

### 2 [精神的內容]

フレーベルは、ここで「子どもはまだ全く無自覚ではあるが、外的なものにおいて内的なものを、統一したもの、一元性、すなわち神を求める。そして、その事実をよく考えるべきである」と述べる。

絵の解説では三組の人達の様子が以下のように述べられる。

まず、幼児を抱いた母親と四歳位の子どもの一組については、抱かれた幼児が下方の三羽の小鳩から眼を離さない様子を指して、「眼で鳩を捕らえて、眼で家まで持って帰ろうとしているようだ」と語られている。また、兄については、目の前の木の枝に山雀の巣と親鳥とを見つ

児 玉 衣 子

けて、我を忘れて立ち尽くして眺めている様子が描かれている。

次に、二人で何か話しながら帰途にある子ども達については、見つけたものについて話に没頭しながら歩いてくる、と語られる。

さらに、石垣の傍らに腰を下ろした母子二人連れの会話として、以下のような内容が語られる。

母「一体どこへ行ってきたの？」

子「中庭、庭、野原、草地、養魚池、小川へ行ってきたの」

母「そこでどんな綺麗なものを見たの？」

子「鳩、鶏、鵝、鴨、燕、雀、雲雀、うそ、鳥、かささぎ、せきれい、山雀、蜜蜂、甲虫、蝶、山蜂」

母「どこで鳩と鶏を見たの？」

子「中庭で」

これ以降、子どもの口から雌鶏、雄鶏が餌をついばむ様子、走る様子。鳥、かささぎ、せきれい、雀などが跳びはねる様子。鵝鳥や鴨が泳いだり潜ったりする様子が生き生きと語られる。

これを受けて、母親は子どもに各々の鳥を括って鳥類であると教える。

これに対して、子どもは鳩は鳩小屋に住み、鶏は飛ばないといって鳥類に括られることに疑問を出す。

母親は、鳥にも住む場所に好みの違いがあり、鶏が飛ばないのは練習しないからであることを教える。

子「では蜜蜂、蝶、甲虫も鳥なの？皆、翼をもち飛ぶから」

母「羽毛がなく巣を作らない体に節のある動物を昆虫というのよ」

この後、子どもは母親に向かって自分と一緒に野外へ行く (ins Freie gehen) ことを勧める。これに対して母親は子どもだけ外出するようにと勧めて、次のように答える。

「今は子どものお前は外で跳びはねているのがいい。でも一家の主婦である母は、家であって家事をしなければならない。あらゆる人はあらゆる立場であって正しいことを行わなければならない。あらゆるものが自分の場所において非常によく秩序づけられて各々自分の務めを立派に喜んで行なっている。

子どもは小鳥のように自分の力を鍛えるために跳びはねていてよい。やがて彼は林檎の木のように一つ場所に居なければならない。この木のように健全な果実を生じるために。だから、出かけてすべてのものを気をつけて見ておいで」。

### 3 [母親、保育者の心の内に持すべき事柄]

上述のようにフレーベルは、子どもの精神はまだ全く無自覚にしても、外的なものに内的なものを、統一したもの、一元性、つまり神を求める、というようにその特質を語った後、続けて母親や保育者に次のように説く。

あなたには、あなたの幼児の精神的発達がいづ、どこで、どのように始まるのか、そして、それがまだ存在しないのと始まりとの境界はどこに、いつ、置かれるのか、また、常にそれがどのように現れるのか、ということが分かっているのだろうか？神の世界では、それが神によって生じたものだから、ひとつの恒久的なもの、すなわち、すべてのものを通じて分離することなく継続する発展そのものが現れる。この保育が行われるように、そのことを心のうちに持ち続けなさい。いつ（Wann・・・太字強調）、つまり時期が早すぎるのではなく、どのように（Wie・・・太字）行なうのか、その方法が未熟なのだ。保育が遅すぎると身体も精神も鈍重になるだろう。早すぎるならば成長後、いわば弱い足の曲がった心で歩き回るようになる。だから、大きい生活の連関の中に幼児を養いなさい。

以上のように、フレーベルは、子どもの精神がまだ全く無自覚にしても、大きな調和の内に統一したものを求めているのだから、それを感じさせていくことが大人の課題であるとしている。

#### 4 [方法的に注目すべき事柄、その他]

母の腕に抱かれた幼児が鳥を注視する様が捕らえられているが、別の著述でフレーベルは「幼児の眼光が対象を貫く時、幼児の内に自覚化の努力があり・・・」<sup>9)</sup>と述べている。つまり、ここではこの幼児にしる散歩に行く幼児にしる、幼児の意識化が取り上げられていると考えてよいだろう。

子どもの注視する対象（ここでは鳥類）について、それらの生態、すなわち時期、場所、方法に注目させていくことが既に⑬「鳥の巣」で強調された。つまり子どもの知的成長に応じて、どういう事柄に注意して注視するのかということが教えられた。幼児がこのような知的手段を得て野外に出かけていくことを、ここでは *ins Freie gehen*（自由へと出かける）と表現している。つまり、対象を知的に知ることは自由と結びつけられている。

この結びつきは、既に『人間の教育』において「学校が与える栄養によってこそ少年は自分がより自由になったと感じるし、また、より自由な活動を営む」<sup>10)</sup>と述べられている見解にも通じるだろう。

さらにこのことは、彼が後の人生の折々に影響を受け続けたと述べている幼時の花体験を思い起こさせる<sup>11)</sup>。そして、その体験の体験たる原点、すなわち、知的に見ることによってもたらされた精神的自由（当然ながら心情的自由をももたらす）が、既に幼児期から知育の基本として生かされていると思われる。

今一つ、幼児の教授方法として、母子の会話の進め方が注目される。

子どもは母の問いかけによって、行ってきた所や見たものを思い出して挙げ、見たものを詳しく描写している。思い出して語ることによって意識化が生じている。意識化によって初めて似ているもの、似ていないものの分類が子どもに生じている。それに対して母親は、個々の種類別の鳥たちを鳥類という上位概念に、個々の虫たちを昆虫という上位概念に括れることを教

えるのである。つまり、経験の意識化が幼児の知的探究の基本的方法とされるわけである。

その際、母親は子どもが自らの経験に筋道やまとまりをつけるのを導き助けている。このような教えこみでない会話の導き方は注目されるべきだろう。なぜなら、そのことによって子どもは自分のペースで自分の注目したものを意識化するばかりでなく、次回に出かけるときへの期待をもふくらませ、ひいては、そのことが精神の成長と精神の自由を導いていくのであるからである。

## ⑩「親指はすもも」

### 1 [子どもの発達の状況]

握りこんだ指を一本ずつ出して数を数えていくのと同じ動作である。しかし、数えて遊ぶのは次の⑪「親指でひとつ」であって、ここでは、指の名称を覚えるのが目的になっている。

### 2 [精神的內容]

子ども向けの歌詞では五本の指の名称とそれらの特徴とが太字強調され、また、大人向けの「説明」では各指の名称が隔字強調されている。

絵の解説では少女達が縫い、紡ぎ、庭に花を植え、少年が木に登りすももをちぎろうとしていると話される。そしてさらに、彼らは自分の指を使いこなせるように訓練していると語られる。

### 3、4 [母親の内に持すべき事柄、その他]

フレーベルは、右手指と左手指との外見上の相違に言及し、それを越える一致と協力が家庭やそれに似た生活単位の中にあることを表現しようとしている、と述べている。

## ⑪「親指のごあいさつ」

### 1 「子どもの発達の状況」

子どもが5本の指を1本ずつ交互にゆっくりと曲げたり伸ばしたりする（親指まがれ、人差し指のびろ、中指かがめ・・・）遊びである。つまり片方の手指を他方の手で1本ずつ曲げたり伸ばしたりする遊びである。これは、⑩の歌に引き続き指の名前を唱えるだけではない。自分の指が他方の手の助けを借りなければ自分の思い通りにならず、その不思議さや他方の手の助けを借りずに各々の指の力だけでできるようになる等、指自体への注目、名称唱え、指の運動等へ自分一人の力で、しかも、より熱中させることになる。

両手の指を一本ずつ交互に重ねあわせる、あるいは逆に外していくという動作を思いのままにすることができるようになるのは、日本では4歳後半頃とされているようであるが<sup>12)</sup>、この

⑰の動作はそれよりも難しい。

## 2 [精神的內容]

題詞には「子どもは四肢を感じている、だから手や指で遊ぶ。母の愛はそれに気をつける、こうして精神の力が目覚めるから。」と語られている。また、「説明」では四肢の不適當な使用が子どもの官能を刺激しやさしい感情を傷つけ、成人においても内面的な最も高貴なものを侵していることが語られる。そしてそれを予防する唯一の根本的な方法は子どもが全身全霊、感情と思惟をもって打ち込める活動と仕事であるとされる。そこから、まず第一に四肢を教育し訓練してそのような活動と仕事ができるようにすること、次に四肢を使うときに官能のすべてを刺激したり無思慮なやり方をしないようにという方法とその注意とが語られる。そして最後に、ここに始まる四肢と感覚の遊び (Glieder-und Sinnenspiel、隔字強調) がそれらを最も本質的な目的のひとつとしてここまで導いてくれる筈であると語られるのである。

⑰および⑱の歌では、子ども向けの歌詞の中の指の名称がそれぞれ太文字で示されている。最高の強調を示す太文字が子ども向けに示されるのは、これら2つの歌だけである。そこで、これらの歌は本書全体の歌の中でも特に、フレーベルが直接に子どもに向かって最も注目すべき対象を指定している歌であるといえることができる。最も注目すべき対象に注目し、その名称を歌って覚え、指の動作によって全身が緊張や不思議さや喜びにはずみ、繰り返し遊びたくなるような集中とその解放とをくり返し経験すること、それにより子どもが活動や仕事へと導かれ、活動や仕事においてもそれらの諸感情や精神の働きの引きつがれていくことが目指されていると見ることができる。

## 3 [母親のうちに持すべき事柄]

上掲2と重なる。

## 4 [その他、方法的に注目すべき事柄]

⑱と⑰とを比較すると、⑰の歌のほうが詞として整った形で指の名称が示されている。つまり、幼児にさえ強調したいフレーベルの意図は、⑰においてより美しい形で示される。そこで、⑰の歌は、第II段階第一区分の中心的な歌と見ることができるだろう。

## ⑱ 「なつかしいおばあさんとお母さん」

この歌は、動作のない歌である。フレーベルの述べる教育の三側面の中の「身体の側面」から検討すると、動作に生じていた3区分の内、第二区分に中心的位置にあることについては既に述べた<sup>19)</sup>。

この歌の「説明」は、始めから終まで母親の心の内に持すべき内容が述べられており、子

児 玉 衣 子

ども自身の発達の状況およびそれに対する精神的 content に関する言及は、以下の記述のみである。

1 & 2 [子どもの発達の状況] [精神的 content]

題詞に「いくつものから全体があることを子どもは既に早くから予感している。だから母親もまたつとめて子どもに家族の輪を教えなさい」と語られる。そして歌詞ではお祖母さん、お祖父さん、お父さん、お母さん、兄さん、姉さん、小さな子ども、家族、が隔字強調で示される。そして家族は「なかよく元気で力をあわせ ただしくりっぱなことをよろこんでします」と歌われる。

家族の輪 (Famillien-Kreis) という語自体はここが初出にしる、その考え方は既に⑭「花かご」に示されていた。⑭の歌においては主人公の小さな女兒の気持が読み手の子どもの気持を誘い出すように書かれていたのに対して、⑯の歌になると歌の中の小さな子どもは、必ずしも読み手の子どもが感情移入して自らとを同一視するように描かれてはいない。むしろ客観的である。そして家族の輪という考えと家族の一般名称とを知ることに重点はおかれている。

3 [母親の内に持すべき事柄]

「説明」では次のような内容が語られる。すなわち、もしも最も慎重な注意と正しい把握と最も綿密な養育を必要とするものがあるならば、それは人間の家庭生活および自然界においてそのように見えるすべてのものである。もしも家庭が慎重さや正しい作法、注意、熟慮などの精神を持った人を学校に送らなければ学校は表面的にはどうであれ空虚であって新たに自由な生命が発展することはない。もしも家庭が神聖を尊び家族の魂、心、情操、精神、新年、思考、行為、生活等を高めて唯一の神の啓示の要求の実現に至らせないならば祭壇も教会も何の意味もない。家庭生活は人類の聖所、神性を養う至聖所であって学校や教会以上のものである。

家庭生活の意義と使命を以上のように述べたでフレーベルは、母親にむかって、だから最も些細な指遊びによっても子どもにひとつの全体 (ein Ganze、隔字強調)、特に家庭の全体の本質を、できれば子どもが実際に体験できるように教えるとよい。およそ全体性 (Ganzheit、隔字強調) のあるところには生命 (Leben、隔字強調) が存在し、分離性 (Getrenntheit) のあるところには死 (Tod、隔字強調) が存在する、と語る。そして、子どもの生活に全体性のあることが子どもの生命の発展に不可欠の根底であることを説く。

最後に、5 という数字にあらわれる生命的意義が述べられる。すなわち、家庭における祖父母—父母—子という二重関係において両親が子との関係で自分達自身 (sich、太字強調) をみることは自分達との関係で祖父母を見ることに等しい。この関係が明らかに示されることは子どもの生活と発達とにとって最も重要である。それゆえにこの絵においても様々な動物や花びらが5つずつ描き込まれている。以上のようにフレーベルは説明している。

家庭を人類という全体の分枝と捉え、家族のひとりひとりを家庭という全体の分枝と捉える。

さらに結婚によって子どもという両親の本質を受け継ぎながらも全く新しい、一人としての全体性をもつ存在が誕生する。それらの神の発展的調和の全体の中にある意義をフレーベルは「1836年は生命の革新を要求する」<sup>14)</sup>において熱心に語っているが、彼のその主張が、この小さな遊びの解説に凝縮して、それも実践に添うまでに血肉化されたように思われる。

#### 4 [その他、方法的に注目すべき事柄]

5 という数字にあらわれる生命的な意義について、本書ではこれ以外にふれた箇所はなく、この記事のみを読むとむしろ奇異な感じがする。しかし、既に『人間の教育』において動物をも植物をも鉱物をも通じて発現する生命および生命に似た現象に数字に表現される法則性を認め、それを神の被造物のあらわす神性と捉えていた彼の捉え方からすれば、この箇所はやはり彼が人間、動物、植物にあらわれる共通の法則性として述べておきたいことがらであったといえることができるだろう<sup>15)</sup>。

そして、筆者にとっては、数字へのこだわり自体よりも、子どもの世界において、子どもが人に限らず動物をも植物をも自分の感情の通じあう親しい存在としていること自体に彼の人間をも動物をも植物をも包み込む思惟と現実の子どもの世界の把握との接点を見出せること、それは、むしろ自然科学の観察眼で対象物としてのみ動植物を見ることに慣れてしまった今日の大人に対して子どもの世界を新たに指し示すこと、そのような点に彼の論の今日性が感じられる。

### ⑱ 「親指でひとつ」

指を一本ずつ折り込みながら指の名称と数をいう遊びである。全部言って指を折り込むと握りこぶしになり、休息と眠りが表現されるという。

#### 1 [子どもの発達の状況]

この歌で、初めて数を数えることが出てくる。現在、3歳くらいの子どもの年齢を尋ねると覚束ない動作で指で示してくれたりする。『新版K式検査法』のテストによれば、数概念の獲得については、3、4歳位にかけて数3～4あたりの数概念を獲得し、4、5歳位にかけて数5～7、8の数概念を獲得する場合が多いという<sup>16)</sup>。

#### 2 & 3 [精神的意義] および [母親の内に持すべき事柄]

題詞に「数えることは何と大きな技術だろう。とても人間には推し量れない。・・・正しく数えることは正しいものを選び悪いものを避けることを教え、真の喜びを与える」と言われる。

眠りの中に生命がまどろんでいるように、数と計算にはより高い意味と人生の重要さがまどろんでいる。数、計算、尺度がなければどうなるだろう。詩人の測り計算する感情がなければ

児 玉 衣 子

詩は価値をもつだろうか。演奏者の無意識の内に正確に計算する感情がなければオラトリオさえ何に値するだろうか。

子どももこのことを予感しているようだ。数えるのが好きで、後の少年の遊戯生活においていわゆる計算遊びが重要性をもつのであるから、だから、特に自然物によって子どもに数えることや数の喜びに意義を与え、それを数と形になったものにおいて発見し、把握するようにさせなければならない。

以上のように、フレーベルは数、計算の意義が人間の思考ばかりでなく情操、道徳にまで至るということを考察の内に明らかにしている。

⑳&㉑「指ピアノ」「指ピアノに合わせる歌」

子どもの相手をしている人の手、あるいはこの遊びを覚えてからでは子供自身の片方の手がピアノの鍵盤になる。

⑲の歌で強調された事柄がすぐここで子どもの生活に展開される。そこで子どもの発達の状況については⑲と同じ位と見ることができ、具体的な年齢を読み取ることは困難である。

この歌においても、子どもに対する精神的意図と母親自身の心の内にもっておくだけの事柄とは、以下に見るように微妙に交錯している。

2 & 3 [精神的意義] [母親の内に持しておくべき事柄]

まず、歌いながら計算する重要さと意義とが語られる。つまり、高さや深さにおいては歌う形式を秩序づけるものとして、量においては運動法則、特に拍子 (Takt) とよばれる運動の組立を秩序づけるものとして、という二重の関係から重要さと意義とが把握される。

しかもこの二重関係は音楽における計算と知識領域にとどまらず、人間としての成熟に関わる可能性のあることが次のように語られる。すなわち、そのすべての営みにおいて運動の秩序というものを知る人を私たちは拍子ある人 (ほどを心得ている人、正しい微妙な拍子をもつ人) と呼んでいる。子どもがごく小さい時から正しい微妙な常識を持った子どもになりうるものがあるとすれば、それを等閑視することはない。だから、早くから子どもを真の自由な歌へと啓発するとよい。

正しい微妙な拍子をもつということは人間の内的な耳、つまり外的な耳が何も聞かない時にも調和的なメロディを聞きとり外的な眼には見えるだけの真実の中に均齋や紛糾を聞き取ることがある。ということに関わる。小さい時から少なくとも、この内的な音の開発の萌芽を培うことは大切である。たとえそれが生活の中にひとつの形にまでならなくても、少なくとも他人の萌芽を理解し承認することを教える。それは他人の生活によって自分自身の生活、人生も一層ゆたかになることである。フレーベルは以上のような内容を述べて、人が自らをも他者をも調和的に形づくっていくべきところに歌の重要さと意義とを置いている。



数理的知識への導入は⑩「たてによこに」において始めてなされた。その時の内容は位置、大きさ、形、数であって目に見える事柄であったが、知識として知ることが目指されたのではなく、むしろそれらを予感として感じることを目指された。この後、⑪の歌では数と計算により高い意味と人生の重要さがまどろんでいることを予感するといわれた。そして⑫⑬の歌に至ると、具体物や手の指の操作ではなく頭の中での計算操作への導入がなされる。ただし、これについても数計算のような意識的操作ではなく、以下に具体的になるように、むしろ美や調和の感覚に結ばれていっている。

「説明」の後半では、子どもと一緒に絵を見る際の説明がなされる。麦の穂、雲雀、ひるがおの花、蜜蜂、戸外の小鳥、カナリア、甲虫、二人の子ども、晴れわたった空の色、太陽の光の暖かさ、風のそよぎ、木陰、草の色、匂い、虫の羽音、子どもの弾く楽器の音色、陽光にきらめく甲虫の背中色彩等々……。

そこに描出されるのはもはや音楽に限定された世界ではなく、無心に合奏する子どもの周りに現出される「生命の調和」(Lebenseinklang)であると彼は述べる。フレーベルの求めた音楽の役割が絵とその説明の文章とに凝縮されているように思われる。

## ⑭「無邪気な姉妹」

課題の下に補足として次のように書かれている「子どもは寝入るとき小さな手を組み合わせる」(下線部隔字強調)。

その下の母親むけの題詞では「母よ深く思え、暗夜に皆ねむっても一人目覚めている者のあることを。あなたが善と思うものによって早くからあなたの子を善に導いていることを信じよ。ひとつに結ばれた生命の内に生きていることを感じさせること、これより良いものを与えることはできない」と勧められる。

これらの文言を受けて、子どもむけの歌では絵の中の腕を組んで寝入っている子ども達を歌いながら、それと同時に子ども達を夜も眠らずに見守る人格的な神の存在が歌われる。そして生命を与え給う神に守られて眠る安らかさが子どもに伝えられるのである。

遊びの動作は手を祈りの形に組むというものである。

### 1 [子どもの発達の状況]

この歌の「説明」においてフレーベルは、子どもがある発達の段階で好んで両手を組み合わせる動作をすることに誰もが気づくと述べている。また、それぞれの指が子どもとして、兄弟姉妹として眺められることは既にずっと以前に始められた(⑯から、筆者注)とも述べている。それゆえ子どもが指遊びで指を人に見立てて遊び、この動作を好んですることに大人が気づいた頃ということになるだろう。

今日においても子ども達がこの動作を好んですることが見出されるとすれば、それはいつ頃

児 玉 衣 子

なのだろうか？このことについては筆者の寡聞のため不明なので、今後の課題としておきたい。

ひとつ確実なことは、既に子どもは眼には見えない対象であっても信頼するという心のあり方を受け入れるほどに成長しているということである。

2 [精神的意義]

上掲の子ども向けの歌に見たように、初めて子どもに直接に歌で神が伝えられる、そのような歌である。神はこれまで母親や父親によって会話をとおして自分たちを見守る方として伝えられていたが、会話をとおしてという間接的関わりであった。

この歌によって、いよいよ子どもは自ら歌う歌によって神を意識するという直接的関係へと導かれる。その際の神は生命を与えたまえる父なる方であり、みんなのために眠らずに見守られる方である。子どもは、目には見えなくても人格的關係の内に守られていることを信頼する心を意識化していくことになる。

3 [母親の内に持しておくべき事柄]

フレーベルはここで手を組むという動作を取り入れていくにあたり、次のように論を展開していく。すなわち、小さい子どもを育てていく上で最も微妙な、しかも最も重要で困難なことのひとつは、子どもの最内奥の最高の感情、情操、予感を育てることである。この生活から、やがて人間生活のすべての最高のもの、最も神聖なもの、つまり情操、思考、行為の中で神と一致した宗教的生活が芽生え、発達していく。いつどこで始まるか私たちは知らない。早すぎても遅すぎてもその芽生え、発達を損なう。

内面的な宗教的生活はどのように外面にあらわれるのだろうか。あるいは少なくとも、どのような外面の現象に、私たちは宗教生活の内面的なものを結びつけるのだろうか。偶然的な外面の現象と最内奥、最深の内面的なものとはどうして必然的に結ばれるのだろうか。両手をおいて組むこと (Das Halten und Zusammenlegen der Hände・・・太字強調) は集中 (Sammlung・・・太字強調) ということにおいて両者に共通する。それは人間的性質の中に深い根底を持つ。

子どもは発達のある段階で好んで手を組む。子の外的表現が内的な生命の集中の表現であるのなら、発達の要求するこのことを養い育てるのは決して不利な影響にはならない。なぜなら、母親のあなた自身が情操の集中を内に持ち、それを育み神聖に保ち、その集中を子どもの内に育むことを自分の義務と認めるのは、ごく自然なことだからである。

以上のようなフレーベルの子どもの宗教教育論は、

- 1、信仰 (教理) 教育以前に必要な、人間の有するところの将来宗教へと向かう心情の涵養の必要を語っている。
  - 2、子どもの発達に即した宗教的心情の涵養の具体的方法を語っている。
- という点で、今日なお極めて注目すべき内容を持っている。

⑳ 「塔の上の子どもたち」

題詞に「子どもと遊んだひとつひとつを繋ぎ合わせてまたひとつの全体に美しくまとめなさい。一人遊びの子を見るのも楽しいが仲間遊びの中にいるのを見るのはなおさらだ 子どもは一輪の花でも喜ぶが多彩な花輪はもっと喜ぶ。こういうことで子どもは既に最小のものも全体の一部ということを感じることができる。」と語られる。

そして、子どもむけの歌詞の前半では花籠 (⑭)、小鳥の巣や卵 (⑬)、鳩の家 (⑮)、小魚 (⑩) 等が歌われ、これらの指遊びがされる。後半では歌の中のおばあさん2人は教会堂へ入り8人の子どもは教会の塔にのぼるが塔が崩れ全員無事に這い出すことになる。

動作を示す絵では、出会ったことを表す両手を打ち合わせたところと挨拶に手を握り合う時の組み方が描かれているだけであるが、実際には上述のように歌詞に合わせてかなり変化する。

1 [子どもの発達の状況]

子どもの仲間遊びへの言及は上掲の題詞が初出である。このことは、ここに至り主人公の子どもは遊び仲間の正式メンバーになって他の子ども達と対等に遊んでいることを示すと思われる。つまりこれまでは「ごまめ」とか「みそっかす」と呼ばれる遊び集団の付録的存在であったものが、ここに至って正員になるまでに成長したということだろう。

子どもが遊び集団の正員になるのはいつ頃からだろうか？今日の保育施設における仲間集団と家庭周辺における仲間集団とでは少々異なるかもしれないが、鬼ごっこの鬼を引き受けられるかどうかということが正員のひとつの資格ではないのか、乏しい経験からではあるが筆者はそう考えている。そうであるならば集団の平均年齢、鬼ごっこの種類にもよるが、およそ5歳前後ではないだろうか。

2 & 3 [精神的意義] [母親の内に持すべき事柄]

「説明」に次のようにいわれる。「題詞に既に述べたが、⑫「おかしづくり」で始まったすべて今までの手と指の遊び、手の結びつきと姿勢、これらの総括である」。そして4コマの各絵の場面の説明が簡単になされ、それ以上の詳しい説明は「かえって窮屈だろう」といわれて終わっている。

II 第II段階第一区分 (⑪-⑳) の特徴

詳しい検討は前回も断ったように全50篇の歌の個々の検討を終えた後にすることにしたい。ここでは、ごく簡単に特徴を挙げておく。

第一に、生命の一致 (Lebenseinigung) が、「他者との人格的關係」の「他者」を広げつつ、

児 玉 衣 子

第Ⅰ段階に引き続き展開される。雛(⑬)、小鳥(⑬⑮)、鳥類(⑮)。人では母の愛(⑬)、父の愛(⑭)が意識化され、保育者が子どもと関わり始める(⑮)。また、神の父愛がさまざまに人格的に語られる(⑫⑬⑭⑲)。

第二に、子どもの周囲の諸対象は、孤立的に存在するのではなく、連関し循環的に結ばれて世界を形成していることが説かれる。ここでは家族の輪、部分と全体という把握も含めておく(⑫⑭⑮⑲)。

第三に数理的知識にいつか発展する内容については位置、形態、数、大きさ(⑪)→数(⑲)→計算、拍子、調和(⑳㉑)と次第に発展させられている。ここでも単なる数理的知識への導入ではなく、都度、その精神的內容、予感等ともどもに語られる。

第四に、生物学的內容に関しては、自然の中の小鳥の営みの時期、場所、方法(⑬)→個々の鳥の生態の観察、鳥類と括る一般化(⑮)等が見出される。

第五に、野外に出かけて観察し、母や保育者に導かれて形成する幼児なりの科学的知識は、その蓄積自体が目的とされるのではない。それが幼児の精神の自由をもたらしゆえに細心に幼児のペースに即して進められる。しかもその際には科学的知識、精神の自由、神の世界という各理解は全体、統一という理解によって有機的連関をもって語られる。

第六に、本区分後半では指を一本ずつ意識的に動かす遊びが集中的に入る(⑯⑰⑲⑳㉑)。精神的意図についてはそれぞれに異なるが、指の名称を知ることと教えたり計算することの重要性が集中的に語られる。

第七に、既に第Ⅰ段階から母親によって子どもにさまざまに親しい方として語られてきた神に対して、子どもは自ら語りかけることができるところまで導かれる。ただし、子どもが教会の中に入るのは本書の歌全体の終わり近くであって、まだこれから先のことである。

第八に、音楽というものは単にメロディや歌詞から捉えて済むものではなく、精神的な拍子(タクト)、内的耳等、人間の調和的生命の根本に関わることが明らかにされる。

第九に、方法上の特徴として、㉑の歌に至ると元へ戻り反復するという方法が採られ、しかもその際に前段階、つまり第Ⅰ段階の終りの⑩「小さな魚」から反復されているという点が注目される。反復という方法とともに、その反復に少しズレを設けるという特徴もまた第Ⅰ段階から既に見出されている点であって、フレーベルの子どもへの発達へのアプローチの仕方として注目される。

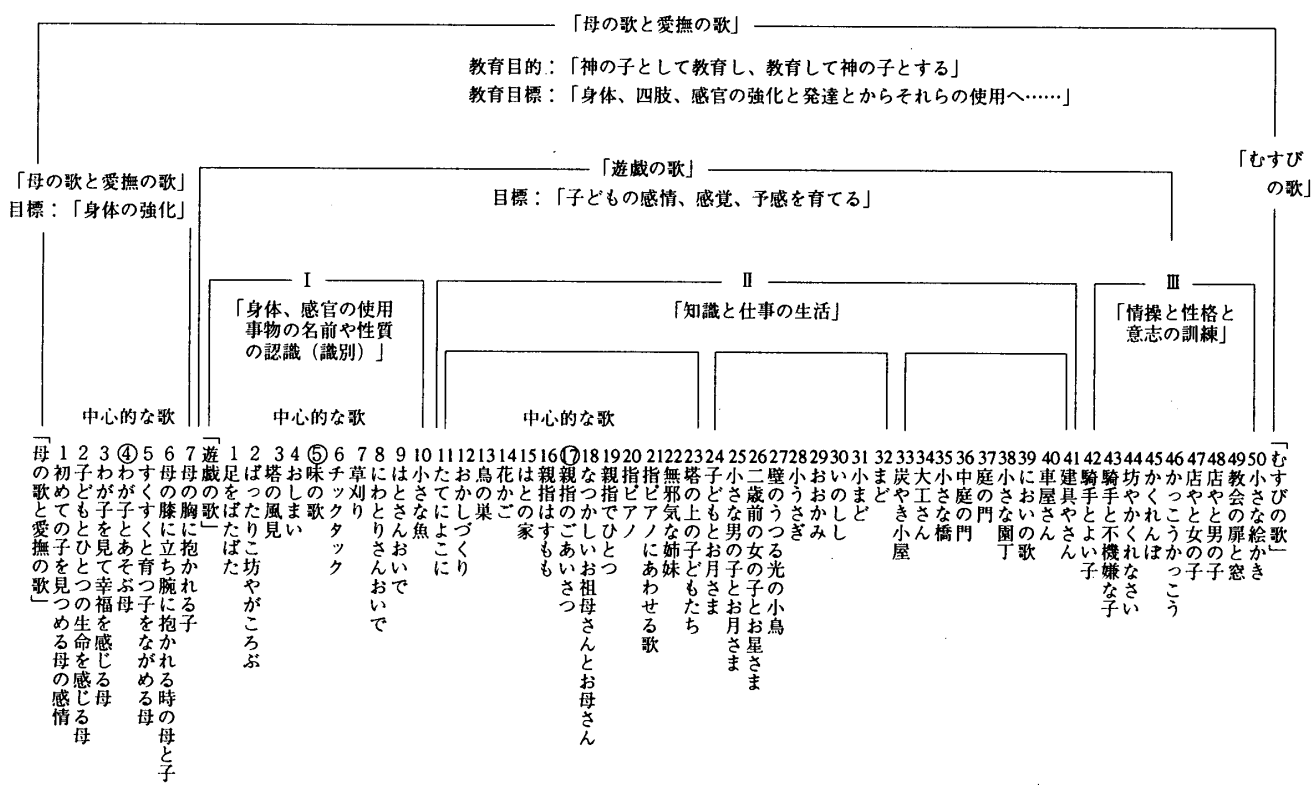
### Ⅲ 第Ⅱ段階第一区分の構成上の特徴

第Ⅱ段階第一区分内の各歌の言及內容の諸検討、および第Ⅰ段階のそれとの関連等については、第Ⅰ段階検討の際に断ったことを繰り返さなければならない。すなわち、50篇の各歌全体の內容検討を行なった上で、行なうことにしたい。

ここでは、本区分の構成上の特徴として、本区分内においても中心的な歌と見られる設定が

見出されることを挙げておきたい。すなわち、直接子どもに向かって太字強調された語の入った詞が、本書中、⑩⑪だけに見出されるということである。しかも、この内、⑪の歌は詩として視覚に訴えるリズム感をもって配置されている。明らかに子どもの視覚に訴える詩形と太文字によって指の名称と指の働きとを印象づけようとしている。

このようなフレーベルの努力は決して偶然になされるのではなく、彼が考えるところの神の被造物全体を通じてあらわれている生成・成長の法則性の人間における場合、すなわち人間の発達の整合性を表現して設定されていると思われる。そこで、幼児にすら印象づけたいという彼の意図の強さをこの第一区分の最高強調と見ると、⑪の歌が以下のように第II段階第一区分の中心的位置を占めているという構成上の特徴を見て取ることができる。その構成上の特徴から精神の成長に手の関わる重要性が強調されていると推測される。



注

歌題については、これまでどおり荘司訳（注11参照）を用いさせていただいた。

本文中の翻訳部分については、基本的に荘司訳および茅野訳（注11参照）を用いさせていただいたが、訳語に相違をみたものについては筆者の訳語とさせていただいた。御寛恕を乞う。

1) 児玉衣子「F. W. A. フレーベル『母の歌と愛撫の歌』の教育方法学的検討—「遊戯の歌」①—⑩に見られる子どもの「精神」の成長—」『北陸学院短期大学紀要』第25号, 1993, 1—21頁。

児 玉 衣 子

- 2) 第10回日本ペスタロッチー・フレーベル学会発表。拙論「F. W. A. フレーベル『母の歌と愛撫の歌』の教育方法的検討—子どもの薄明るくなり始めた精神の認めることについて—」『乳幼児教育学研究』1号を参照していただけると幸いである。
- 3) F. W. A. Fröbel, Die Menschenerziehung, Friedrich Fröbel's Gesammelte Padagogische Schriften, Bd. 1, Hg. von Dr. WICHARD LANGE, Neudruck der Ausgabe 1863, Osnabruck 1963, S. 242, (以下, ME と略記), 荒井武訳『人間の教育』(下), 岩波書店, 1964, 106頁。
- 4) R. シンチンゲル他編『現代独和辞典』三修社, 1983, の backen の項目参照。
- 5) 保育者の参入については拙論「F. W. A. フレーベル『母の歌と愛撫の歌』における子どもの『他者との人格的關係』の発展」『人間教育の探究』4号, 日本ペスタロッチー・フレーベル学会紀要, 1991に既述しており, 参照していただけると幸いである。
- 6) 矢野智司『子どもという思想』玉川大学出版部, 1995, 80-86頁参照。
- 7) フレーベル「1836年は生命の革新を要求する」『フレーベル全集』3巻, 玉川大学出版部, 1977, 521-630頁参照。
- 8) フレーベル「アルテンシュタインにおける遊戯祭」『フレーベル全集』5巻, 玉川大学出版部, 1981, 213-272頁および宮田修「幼稚園時代の追憶」『婦人と子ども』18巻1号, 1918, 1, 13-16頁参照
- 9) 荘司雅子訳「幼児, あるいは子どもの初めての活動の重要性」『フレーベル全集』3巻, 玉川大学出版部, 1977, 343頁。
- 10) ME, S. 93, 荒井武訳『人間の教育』(上), 176頁。
- 11) F. W. A. Fröbel, Mutter- und Koselieder, Blankenburg, Bl. 61-62. 荘司雅子「母の歌と愛撫の歌」『フレーベル全集』5巻, 玉川大学出版部, 1981, 262-263頁(以下, 荘司訳と略記) および茅野蕭々『母の歌と愛撫の歌』, 岩波書店, 1934, 136頁(以下, 茅野訳と略記) 参照。  
長田新訳『フレーベル自伝』, 岩波書店, 1949, 18-19頁参照。
- 12) 田中昌人・田中杉恵『子どもの発達と診断4』大月書店, 1986, 146頁。
- 13) 拙論「『母の歌の愛撫の歌』における動作の系統性」『第41回日本保育学会論文集』1988。
- 14) 注7参照。
- 15) ME S. 121-124, 荒井武訳『人間の教育』(上), 226-232頁。
- 16) 嶋津峯真監修『新版K式発達検査法』ナカニシヤ出版, 1985, 217-218, 412-413頁。

なお、本稿は第12回および第13回日本ペスタロッチー・フレーベル学会個人研究発表に提出した論稿をまとめたものである。